

マツザワケ

水絹 望音

わかったから、そこから出てきておくれ。

テレビ画面には、仁王立ちする夫がやや俯瞰的な視点で映っている。小脇に抱えている攻略本は、さっきまで机の上に置かれていたものだ。

「ゲームじゃなくてさ、もっと夫婦の話をしようよ」

ゲームに没頭する夫に、ほんの少し注意をただただ。そんなことでゲームの世界に逃げ込むなんて、まるで子供だ。

机の上に放置されたコントローラーが、ブーブーと不満げに振動している。手に取って操作すると、それに応じて夫は動き出した。彼の言葉が、画面下部に文字で表示される。

♪マツザワ夫…まずは始まりの森でレベル上げをしてくれ♪

「僕の人生は、地道にレベル上げをしてこなかったのさ。だから、ラスボスみたいな上司に逆らえるわけがないよ」

会社から帰って、疲れ果てた彼がふと漏らした言葉を思い出す。マップ上には、「始まりの森」にポイントが打たれ、冒険を急かすように点滅している。

始まりの森につくと、魔物が戦いを挑んできた。夫は、大きな剣をとりだす。戦闘はターン制で、すばやさの能力値に応じて先手が決まるらしい。普段緩慢な動きでナマケモノを彷彿とさせる夫が、なぜか先手を取る。

敵は、軽くタックルしただけであっさり倒れてしまった。夫は過剰な演出とも言える盛大なファンファーレに包まれ、レベルを上げた。

それからというもの、ゲームに向かう時間は、なぜか私の生活にすっかり馴染み、習慣になった。

ある日、今までと比べものにならないほどの強敵が出現した。一目で強さが伝わってくる極悪な外見。巨大な体躯。禍々しいオーラ。夫は敵を見上げ、大剣に手をかけている。

期待と不安。挑戦と退避。私は手汗をシャツで拭い、コントローラーを握り直す。

覚悟を決めて、「たたかう」を選択し、ボタンを押し込む。だが、反応がない。心に芽生えた闘志を打ち付けるように何度もボタンを押し込むが、何度やっても反応がない。やがて私の闘志も萎びていった。

「戦いたくないのね」

夫の希望通りに「にげる」を選択すると、彼はほっと安堵の表情を見せた。それ以降、強

敵が現れると選択肢は「にげる」一択となってしまう、選択の余地すら与えられなくなった。

弱い敵で細かく経験値を稼ぎ、強い敵が現れたら一目散に逃げる。私は手に汗握ることなく、ただ情眼を貪るようにゲームに耽っていた。

強敵の出現。私は無意識にAボタンを連打する。そもそも選択肢がないのだから、強敵と出会う演出は不要でしかないのだ。すると、なぜか突然、戦闘画面に切り替わった。

え、うそ、と身を乗り出してしまふ。

「戦うの？」

夫は大剣を両手に握り、大きく肩で息をしている。「信じてくれ」とでも言わんばかりの勇ましい顔つき。

勝てるかもしれない……。そう思った。

細かく積み重ねた経験値が山となり、気づかぬうちに彼を高みに押し上げていたのではないか。

「わかった。やってやろうじゃない」

攻撃技を選択し、ボタンを押し込む。夫は、敵に先手を取られ、往復ビンタというシンプルな攻撃で叩きのめされた。

「勝てないなら、なんで戦ったのよ」

街に引き返し、夫をベッドに横たえる。夫は仰向けになり、口を小さく動かした。

「マツザワ夫…強敵を避け続けるゲームなんて面白くない。そんな思いをプレイヤーの君にさせてしまっているのは、ゲーム好きとして心苦しかったんだ。ゲームは、困難を乗り越えるから面白い。敵が強いなら、武器を強化して、仲間を集めて、知恵を絞って戦ったらいい。僕はこの敗北を乗り越えて、必ず魔王を倒す」

ポロンポロンと、小気味のよい音楽がそっと響き、画面は暗転した。

翌朝、全回復した夫がベッドの脇に仁王立ちしていた。部屋の机には、攻略本が開いた状態で置かれている。

「マツザワ夫…仲間を探しに行こう」

マップの一角所にポイントが打たれ、点滅した。現在地から近い街だ。

街に着くと、ダニエルという養鶏農家が困った顔をしていた。事情を聞いてみると、養鶏場の柵が壊れ、飼っていた鶏が脱走してしまったらしい。

「ダニエル…柵が修理できるまでここを離れられないんだ。申し訳ないが、脱走した鶏を探してきてくれないか」

夫は力を込めて頷いた。そして、あつという間に全てのニワトリをダニエルの元に帰した。夫が、「仲間になってくれ」と頼むと、ダニエルは快諾してくれた。

ダニエルは夫の良き相棒となった。二人は見事なコンビネーションを発揮し、次々と強敵をなぎ倒していった。

そして、度重なる困難を乗り越え、ついに魔王を倒した。夫の最後の攻撃は強烈な往復ビンタだった。スローモーションでふき飛ばされる魔王。私は思わずガッツポーズをした。

平和な世界の到来。エンディングのスクロールが流れ、壮大なゲーム音楽が鳴り響く。テレビ画面には、これまで訪れた街や出会った人々が次々と映し出された。「夫はこんなに多くの人に導かれ、支えられてきたんだ」と胸が熱くなる。

エンドロールが終わると、画面は夫の部屋に切り替わった。なぜか夫はスーツ姿だ。

「マツザワ夫…今日で僕たちが結婚して三年だ。僕は君と結婚ができて、本当に幸せ者だ。ありがとう」

私は、はつとする。三年目の結婚記念日に、夫婦が別々の世界にいることを寂しく感じた。すると、テレビ画面からひょいっと夫の手が伸びてきた。思わず手を握ると優しい温もりが伝わってきて、懐かしい気持ちに胸が広がった。

「マツザワ夫…僕はこの、努力が報われる世界で、君と一緒にになりたい。そして最高のマツザワケを作りたい。この世界なら努力次第でどんなことでも叶えることができる。だから、こっちの世界と一緒に暮らそう」

「何を言っているのよ。もうクリアしたんだから、戻ってきて」

「マツザワ夫…せっかく苦勞してレベル上げをしたんだ。現実の世界に戻ったら、それもリセットじゃないか」

「仕方ないじゃない。そんなのどうすることもできないよ」

「マツザワ夫…こっちの平和な世界と一緒に暮らせばいいじゃないか。どんな家庭でも築けるさ」

「どんな家庭でもって、結局ゲームにプログラムされていることしかできないでしょ」

「マツザワ夫…大抵のことはできるさ。それに現実だって、年齢や性別、学歴、資産、あらゆる要素でがんじがらめじゃないか。ゲームの方がよっぽど自由度は高い」

「そういう問題じゃない」

テレビ画面を挟み、現実とゲームの世界で手を引きあう。夫のもう片方の手が画面から飛び出てきて、私の左手に持っていたコントローラーを掴んだ。

「マツザワ夫…そういう問題じゃないなら、どういう問題なのさ」

体がぐいっと強く引っ張られ、私の上半身がゲームの世界に引き込まれた。

「マツザワ妻…画面の中の窮屈な世界で生活するなんて、私は嫌。だいたい攻略本を持って隅々まで旅をしたんだから、もう満足したでしょ」

懸命にコントローラーを引っ張り返す。今度は夫の上半身がにょいっと現実の世界に飛び出してきた。

「満足なんてとんでもない。攻略本に書かれていることは世界のほんの一部だ。僕はこの世界を味わい尽くすんだ」

「現実を味わい尽くしてよ」

「だめだ」

「どうして？」

「そもそも現実には攻略本がない。それじゃあ、味わい尽くすどころかクリアすらできない」

「攻略本はないけど、ひとつずつ乗り越えていけばいいじゃない」

「乗り越える？ どうやって？」

「どうやって……」

「現実レベル上げをして装備を整えたところで上手くいくとは限らないじゃないか！」

「そうだけど……」

「ダニエルだっていない！」

「ダニエルはいないけど……」

「私がいるでしょ！」

「ひゅんっ。がらがらがっしょん！」

テレビ画面から、夫の全身が飛び出した。夫は激しい音を立てて床を転がり、奥の壁にぶ

つかってようやく止まった。

生きているか不安になり、声をかける。

「大丈夫？」

夫の肩は小刻みに震え、嗚咽が漏れていた。現実の世界に引き戻された彼の苦悩を感じ、なんだか申し訳なくなつた。

彼はむくっと起き上がり、テレビ画面に向き合った。そして、低い声で言った。

「もうゲームはやらない」

「全くやるなどは言っていない」

「いや、そうじゃなくて。もうできないんだ」

ほら、とテレビ画面を指さす。

「ほら、さっきのはずみでコントローラーが向こうの世界に」

テレビ画面の中央にコントローラーがポツンと転がっている。

「本当だ。あれ、ダニエルが歩いてきた」

画面上のダニエルがてくてくとコントローラーに近づき、拾いあげた。そして、正面を向いて、コントローラーを構えた。

※ダニエル…まずは始まりの会社に行こうじゃないか※

突然、夫が右へ左へと動き回り始めた。

「体が勝手に動くぞ」

夫は壁にぶつかることも厭わず、不自然な態勢で駆け回る。その勢いのまま、スーツに着替え、バッグを持ち、家を出て行ってしまった。

きっと夫は、「始まりの会社」でレベル上げをさせられるに違いない。ゲームの世界とは違い、最初から強敵ばかりであろう。いざとなれば、私が一緒に戦ってやらないこともない。

私たちは「最高のマツザワケ」になれるのだろうか。

テレビ画面に映るダニエルがこちらを向き、親指をグッと突き出した。